

事業場の管理・業務状況等の確認（実地調査）のデジタル化を実現する製品・サービスの調達時におけるサイバーセキュリティ上の留意点

デジタル庁  
デジタル法制推進担当（技術カタログ公募担当）

テクノロジーマップ・技術カタログを活用し、業務のデジタル化を進めるにあたって、サイバーセキュリティ確保の観点から、本技術カタログに掲載されているデジタル技術の導入に当たって留意すべき点を整理しました。

規制所管省庁の皆様に限らず、地方自治体や規制対象事業者の皆様におかれては、本資料において提示している点を踏まえ、デジタル技術の導入のご判断に活用いただけると幸いです。

**本技術カタログに掲載された製品・サービスを調達する際の留意事項**

**【セキュリティに関する認証の取得状況】**

- 製品・サービスの一部にクラウドサービスを利用している場合には、提供している製品・サービスにおいてクラウドサービス特有のリスクに対する管理策が講じられていることを確認することが必要である。この際、それを明示的に示す認証である、ISO27017（ISO27001を含む）の取得の有無を確認することが推奨される。

**【脆弱性検査の実施に関する情報提供】**

- サイバーセキュリティの確保の観点から、製品・サービスにおける脆弱性検査の実施は必須となる。したがって、調達する際には、調達する側自身が製品・サービス利用のリスクを正しく評価するため、判断に必要な情報提供を事業者を求めることが推奨される。その際には、脆弱性検査の実施の有無のみならず、適切な国内外のガイドラインに沿った検査がなされているかどうかや、製品・サービスにおける脆弱性検査の対象箇所（個別機器、システム、サービス全般など）や脆弱性検査の実施者（自己、第三者）、実施頻度などについての情報提供を求めることが挙げられる。

**【データ保存先に関する情報提供】**

- 取扱い業務データの保存国が日本国外となっている場合は、日本以外の複数国のデータセンタのすべてのサーバが同時にサービス提供できなくなる場合や国外とのネットワークがすべて途絶した場合には、業務サービスが継続されなくなるリスクがある。そのため、保存されたデータが適切に保管・管理されるかについて、判断に必要な情報提供を事業者を求めることが推奨される。その際には、調達する側自身も、クラウドサービスに保存されるデータの可用性や個人情報が含まれるかどうかの観点からリスクが生じた際の被害度を鑑みた上で、判断する

ことが挙げられる。

- 取扱い業務データの保存国が日本国内のデータセンタとなっている場合でも、製品・サービスにおいて利用している IaaS によっては、日本国外にデータを保存する可能性もあることから、同様の情報提供を事業者を求めることも推奨される。

以 上